目白大学　人文学研究
第11号　2015年　137－151

インドの家事労働者の回顧録に関する一考察
G. C.スピヴァクとサバルタン・スタディーズの言説を使って

A Study on the Memoir of an Indian Domestic Worker: "A Life Less Ordinary"
—through the Ideas and Discourse of Spivak, G.C. and Subaltern Studies—

新村　恵美
Megumi NIIMURA

Keywords：subaltern, India, domestic worker, autobiography, memoir, Spivak
キーワード：サバルタン、インド、家事労働者、自伝、回顧録、スピヴァク

はじめに：研究の背景と問題意識、研究の枠組み

ベイビー・ハルダー（Baby Hadler, 1973–）の"A Life Less Ordinary"（2006）は、インドのデリーに住む家事労働者ベイビーの半生の回顧録である。ベイビーは、幼少期の父親の不在、母親の家出、父親の度重なる結婚と暴力の中、12歳で父親が決めた相手と結婚、13歳で出産を経験する。20歳代半ばで、夫の暴力から逃れて子どもたちの教育環境を整えたいと、3人の子どもを連れてデリーに出て家事労働者として働くようになる。数軒目の家の雇用者であったPrabodh Kumar [1] の勧めでベイビーは自分の物語を書く機会を得る。2002年にKumarが訳したヒンディー語で出版され、2004年にはベイビー本人によるベンガル語版、それに続いてインドの他の言語でも出版される。英語版は2006年にUrvashi Butalia [2] の翻訳で出版され、その後海外の数々の言語にも翻訳されている。

この本は「サバルタン自伝」と評され（Pandey 2013：168）、日本でも話題になったプーラン・デビ（竹中 2010）と並んでベイビーは「サバルタン」と紹介される（Castaing 2014）。実際、プーラン・デビの物語で衝撃的に描かれたインド社会における表象は、ベイビーの身近にもあった[3]。支配的な家族の下で「語る」ことを抑圧されてきた「サバルタン」であったベイビーの半生は、29歳でKumarの家に雇用されてから大きく変化する。サバルタンであった者がその経験を言語化したことでサバルタンだった当時を語ることができ、支配する者たち—ベイビーの本の読者の多くがあてはまるだろう—は、この本でサバルタンから「まなざされる」経験をする。

本論文は、サバルタン研究と、その研究グループに一石を投じ「サバルタンは語れるか」と

にいむらめぐみ：外国語学部日本語・日本語教育学科非常勤講師

いう論説を展開したスピヴァク（Gayatri Chakravorty Spivak）の言説を通して、ベイビーの回顧録を読み解く試みである。主に2点を問題意識として持つ。第1に、「サバルタン」はどのようにしてサバルタンになっていくのかである。幼少時代のベイビーは、厳しい家庭環境の中でも、親戚や学校の先生たちの優しい眼に見守られ、父親の不在中に友達と子供らしい遊びをしたり、想像力を働かせて物語を語ってきかせたりする、生き生きとした子どもであった。しかし父や夫など支配的な者たちの態度や、抵抗しても聞き入れられない経験の繰り返しによって従順にならされていく―差別する側の言説を内面化し声が上げられなくなる―過程が描かれている。

第２の問題意識は、雇用者の家事労働者へのヘゲモニーについてである。多くの人の共感を得て名前を知られる作家になったベイビーは、最初の本の出版から10年以上経った今も、同じ雇用者の家で家事労働者として働き続ける。本人は家事労働者を「階級を下げる仕事」と認識している（Halder 2006：102）にもかかわらず、なぜなのか。ベイビー本人の特質によるものなのか、それともサバルタン性との関係があるのか、という点について考察する。

そこで本論文ではまず、サバルタン研究とスピヴァクの言説について概観する。続いてベイビーの人物像の描写を試み、同時にベイビーを取り巻く人物についても、本稿に関係ある点を記述したい。その後、ベイビーの本で描かれる表象について、スピヴァクおよびサバルタン研究者たちの言説を使って、上掲の問題意識についての議論を試みる。最後に、サバルタンの自伝の意義＝「声を獲得した」当事者が語ることの意味と知識人・研究者の役割について、また、スピヴァクの強調する、公的領域へのアクセスの確保と、「欲望の再配置」について論じたい。

１．サバルタン・スタディーズとスピヴァクについて

（1）サバルタン・スタディーズとスピヴァクの「介入」

「サバルタン・スタディーズ」は、1980年代に展開したインドの新しい歴史学の潮流であった。さまざまな領域の研究者が集ってグループを組織し、オックスフォード大学から刊行されている《サバルタン・スタディーズ》を舞台に、共同研究による論文を発表してきた（竹中 1996：285、﨑山 2001：14）。本来サバルタンという言葉は〈下位の〉〈従属する〉と言う意味だが、それを転用して《エリートに対峙する民衆》といった意味で使われている（竹中 1996：286）[4]。南アジアの歴史記述は、宗主国であれ植民地エリートであれ、支配的な階級によってなされたもので、サバルタン諸集団は歴史の主体とはされてこなかった。そのサバルタンを歴史の主体に登場させる、つまり、「サバルタンに語らせる」画期的な試みであったと言える。

では、「サバルタンは語ることができるか」という著書とともに知られる、スピヴァクが行った介入とは何だったのだろうか。それは、（男性）知識人たちが「普遍的な」「主体」を定め

ることを前提にしたことによって、重層的に排除されてしまう者がいることを訴えたことである（スピヴァク 1998、崎山 2001：32–53、粟屋 1999：216）。すなわち、被抑圧者を「主体」にして代弁するとしても、第1にそれは知識人の具体的経験を通じてなのであって知識人自身が透明な存在ではありえないということ（スピヴァク 1998：15）、第2に、その「主体」として男性サバルタンが想定されていること（スピヴァク 1998：115）―これらのために、サバルタンの女性は二重に排除されることになるのではないか、とスピヴァクは理論的に問いかけたのである。そしてスピヴァクは、サバルタンとは「社会を自由に移動できない人」であり「抵抗しても抵抗として認められない人」として定義される必要があると言う（スピヴァク 2008：82–83）。

「サバルタン」という言葉の使用には危うさがつきまとう[5]。スピヴァクは、サバルタン的な文化的背景を持つ植民地エリートがサバルタンを自称することは「犯罪的」とさえ述べており、「サバルタン」を頻繁に使用すること、特に文化的文脈にまで使うこととで「枯渇する」、と指摘する（2014：77）。

（2）G. C. スピヴァクについて

スピヴァクは1942年、インド西ベンガル州のカルカッタに生まれた。カルカッタ大学を卒業後19歳で渡米し、コーネル大学で英文学の博士号を取得している。1967年にデリダの「グラマトロジーいついて」の英訳を刊行し、その序文とともに注目を浴びた。デリダの「脱構築」を政治・社会的分野に拡張し、人文社会学に多大な影響を与えた他、ポストコロニアリズム、サバルタン研究にフェミニズム的介入をした理論家でもある（上野 2012、他）。スピヴァクの理論は、1986年に「底辺から学ぶ準備ができた」と感じて開始した、バングラデシュ農村地域での教育とPHC（プライマリ・ヘルス・ケア）の活動をはじめ、教育の実践との往復に依るところも大きい[6]。

2012年には、「知的植民地主義に抗う、開かれた人文学の提唱と実践」という功績で、京都賞[7]の受賞者として来日している。その時の日本での記念講演でスピヴァクが話した、生まれ育った環境、家庭についての言及は、スピヴァクの思想を理解するヒントになるだろう（スピヴァク 2014：17–20）。

スピヴァクが生まれたインド独立前の西ベンガル州には左翼の伝統があり、スピヴァクは高位カーストの中産階級[8]の家庭の両親の下、「他人への配慮ができる人間に」と育てられた。母は「無条件に倫理的であることをつねに目指して」おり（スピヴァク 2014：19）、自らも多くの人びとに可能性を開く活動を行っていた。母親は当時の高位カーストの女性にはめずらしくない14歳で結婚しているが、24歳で修士号を取得し独立した知識人として過ごしている。父親は将来を嘱望された民間外科医であったが、性暴力事件の裁判でうその証言をすることを拒んだゆえにそのキャリアを棒に振ったという経緯があった。その父がスピヴァクを連れて行った郵便局の前で長い列を作る人々を見て、「おまえは私の娘でしかも階級も上だから、皆が

お前を列の先頭に立たせるだろう。でも覚えておいで、いつも列の最後に並ぶのだよ」と言い、スピヴァク自身は前に進む可能性があるたびにこの言葉を思い出したという（スピヴァク2014：19）。

２．ベイビーの生い立ち、経験の概観と、取り巻く人々

ベイビーは、“A Life Less Ordinary”を、豊かな感受性と言葉で語っている。本稿は、ベイビーに感傷的な共感を寄せることを目的としているわけではないが、ベイビーが「サバルタン」を脱することができたのは彼女の特質によるところが大きいことから、主要な論点に入る前に、サバルタンとして一般化することができないベイビーの特性や彼女の半生に影響を与えた人たちについて、記述したい。

ベイビーはジャムー・カシミール州に生まれ、子ども時代から、家事労働者の仕事を見つけにデリーに来るまでのほとんどを西ベンガル州で過ごした。４歳の時に、母は買い物に行くと市場に出かけたきり帰ってこなかった。自伝には、実母への強い思いが随所に記されている。父親の暴力や勝手なふるまいのために、引越や居候を余儀なくされ、大好きな学校も中断することがあった。初潮を迎えてからは、父親と継母はベイビーを「心配」し、たまたま友人から「こんな男がいる」と紹介されただけの26歳の相手と12歳で結婚させてしまう。結婚を「みんなが集まって食事をする」程度のことにしか考えていなかったベイビーは、誰からも説明をされないまま、すぐに妊娠し、13歳で１児の母になる。それから10数年経ってデリー近郊に住む雇用者Kumarの家に雇われたのは、エスカレートする夫の暴力から逃げて３人の子どもたちに教育を受けさせたいという思いでデリーに来て、数軒の家で家事労働者として働いた後のことだった。

このような表象があり、その時々の苦しみの描写がありながらも、ベイビーの自伝から浮かびあがってくるのは、向学心旺盛で想像力が豊かなことだ[9]。結婚するまでに７年間、断続的ではあるが学校へ行くことがベイビーの何よりの楽しみであり、実母が残してくれた大切な教えと意識し続けた。このような特質は、Kumarの家に家事労働者として雇用されてから大きく展開する。普段はKumarを驚かせるほど手際よく仕事をするベイビーが、書斎の本棚を掃除する時には手が止まり、本のタイトルに見入っていることにKumarが気付き、「好きな作家はいるのか？」と聞く場面がある。

> 私は彼を見て笑った。「はい、何人か知っています。ラビンドラナート・タゴール，カジ・ノジュルル・イシュラム、シャラットチャンドラ、ショテンドロ・ナト・ドット、シュクマル・ラエ[10]」なぜ私がこれらの名前を出したのかわからないが、Tatushは私の頭に手を置いて、驚きに満ちた目で私を見た。自分の耳を疑っているようだった（Halder 2006：142）。

この後Kumarは、ベイビーが選んだタスリマ・ナスリン[11]の“My Girlhood”を貸して読むように言う。さらに数日後、Kumarはノートとペンを渡し、自分のことを書いてはどうかと言うのであった。

もう１点特筆すべきベイビーの性質は、彼女が家事労働者として働き始めたときに存分に発揮されるのであるが、その場で求められることを察知し適切にふるまうことができることだ。夫には家族がいないと知らされていたのだが、結婚の２年後に義父が夫の所在をつきとめて訪ねてくる。初めて会うベイビーは、瞬く間に義父に気に入られ、実家に呼ばれて畑の収穫期の家事の手伝いなどを期待される。そこで彼女は求められる「嫁」の役割を果たし、親戚の誰からも気に入られる。仕事が一段落すると、池で近所の人たちが見守る中、義弟と競泳したり、近くの丘を登る競争をしたりと、ベイビーは自然体で受け入れられる（Halder 2006：70–71）。Kumar以前の雇用者の家でも、求められることが短時間でできるので家族から気に入られている様子が描かれている（Halder 2006：102–103）。

大勢登場するベイビーの親族についても述べておく。父や夫の暴力から逃げて突然訪ねて行く親戚の家では、叔父や叔母が優しく迎え心配して長い滞在を許してくれる。その間にベイビーは従妹たちと束の間の安息を得ることができている。しかし、必ず父や夫の家に戻ることが期待されていた。実際、夫の家を出て３人の子どもを連れてデリー近郊の親戚を訪ねたベイビーに、彼女が戻るつもりがないと知ると、皆が冷たくなる。夫がいないと家も仕事も見つかりにくく、親せきも誰ひとり味方にはついてくれない。「なぜ夫の所に帰らない？」と言う。

最後に、雇用者Prabodh Kumarは人類学の元教授である。自伝の中でベイビーは、Kumarに言われたとおり、親しみを込めてTatushと呼ぶ。彼はベイビーに「ライフストーリーを記録するのは私の仕事でもあるのだよ」と言っているように、彼は自身の知的好奇心からもベイビーにライフストーリーを書くことをすすめ、全面的に支援した人物である[12]。

３.「サバルタン性」はどのように再生産されるのか

本の著者ベイビーのサバルタン性は、Kumarとの出会いによって大きく変わった。本節では、ベイビーの状況を、サバルタン・スタディーズとスピヴァクの言説から考察する。

（１）周囲からの否定による、言葉の喪失

ベイビーは幼少の頃から、自身の状況への率直な疑問を持っていた。しかし、周囲の慣習を内面化していく、せざるを得ない状況が描かれている箇所がある。

近所に住んでいて、ベイビーの息子ともよく遊んでくれるAjitが、ベイビーにつきまとう場面がある。ベイビーのたびたびの警告にもかかわらず、予期せず待ち伏せしたり家の周りをうろついたりする。初めは自分に非はないと自信を持っていた。しかし、「私には落ち度は何もないはずなのに、近所では私が悪い人になって、彼は何もとがめられない」のが続き、夫はベ

イビーに非があると責め、近所の人たちもAjitとベイビーのどちらが悪いのかと噂をするようになる。そして、「しまいには、もしかしたら私にも悪いところがあるのではないかと考えるようになってしまった。多分すべては私の過ちなのだ。」と考えるようになる（Halder 2006：79）。人々の先入観や噂を自分のものとして取り入れざるを得ない状況になる。

別の場面では、父親からの露骨な「拒絶」に驚き、しかしそれを受け入れざるを得ない状況にベイビーは遭遇している。妊娠がわかった時のことだ。

> 私は［妊娠の祝いのための］サリーを着て戻ってくると、父の足に触ろうと屈んだ[13]。しかし父は後ずさりした。衝撃を受けて見上げると、父は継母を見ながら言った。「少女が妊娠したら、その子の挨拶は受け取らない方がいい。その子の子宮にいるのが蛇、蛙あるいは神なのかわからないからね。」それをきくと、おばも私のあいさつを受けるのを拒み…（Halder 2006：40–41）

ベイビーはこのあと、言われたとおり一人で座り、黙って食事をとる。なぜそのような態度に出られるのかという抵抗さえもしない。

（2）抵抗を抵抗と認められない：「サバルタンは語ることができない」

ベイビーは、夫の暴力に耐えかねて父と継母を頼って逃げてくる。夫の家に戻ることに強く抵抗するが、彼女の悲痛な叫び声が耳を傾けられない経験を何度もする。一度、父親はベイビーを村議会へ連れて行くが、父親が村議会に伝えたことは、彼女の意向と全く違っていた。

> ［村議会の調停の場で］父は私の夫に言った。「今後は私の娘が家を出なくてもいいように気を付けるように。彼女に必要なもの揃えて、彼女が二度と家を出なくてもいいように約束するのだ」こう言って、父は出て行った。私は打ちのめされた。［村議会までの道中］、私は父に、なぜ家に帰りたくないか説明を尽くした。彼は、なぜ私が帰らなければならないかのあらゆる議論を使って私を説得しようとした。結局は、私は従うだけだった。もしみんながそういうのなら、たぶんそれが正しいのだろう（Halder 2006：86）。

抵抗とは、相手から認められているからこそできるのである。「サバルタンは自分で自分のことを語」っているし、サバルタンでない人と同様、内面に感情を持っている（スピヴァク 2008：67–95）。サバルタンとそれ以外の人との違いは何か—誰もサバルタンの言うことに耳を傾けないことである、とスピヴァクは言う。「抵抗がなされても、抵抗がなされたという認識を産むような社会基盤がない」、つまり、サバルタンは公的な領域にアクセスがないという状況である[14]。「サバルタン性という問題は、なにも持っていない人々、社会における移動手段を全然持っていない人々という次元で、理解されねばならない。」と説く（スピヴァク

2008：p82−83）。

（3）サバルタンが「語る」とは

耳を傾けてもらえない、聞こえても無視される、抵抗しても抵抗とみなされないサバルタンがどうしても「語る」時、どうするのか。

ベイビーの家の近所に住む女性が「語った」光景が描写されている。その女性が近所の家でテレビを見ていたところ、普段からよく酔っぱらって暴力的だった夫がやってきて、妻をつかみ家まで引きずりもどした。その後の場面である。

> そこで彼らはけんかしたに違いない。突然彼は妻に酸をかけて火を探した。対抗して、妻はマッチを自分で持ち、彼の手にぴしゃりと渡して言った。「私を殺せば気が済むのなら殺しなさい。ほら、ここよ！」。Panna〔夫〕は酔っていた。彼はマッチ箱を取るとマッチに火をつけ、彼女に投げた。彼女はまたたくまに炎に包まれ、服が肌をもやし、彼女の肌は青白くなった。…裸になった…隣に住むLataは、その妻が家の壁にバタンとぶつかり、痛みで泣くのを聞いた。Lataが助けを求めて大声で叫ぶと、大勢の人たちが彼らの家に走った。私たちも駆けつけた。彼女は壁によりかかって半ば立っていて、彼女の肌はやけどで水膨れになっていた（Halder 2006：98）。

これは、家父長制下での女性の抵抗様式として上野が説明する「覇者が与えた『指定席』の役割をみずから引き受け、それを過剰に演じてみせる」ものであり、「敵の武器を取って戦う」のに類似するものである（上野 2013：195）。上野は日本の作家の小説[15]の分析として紹介するが、「夫の専横な期待を『やりすぎる』ほど引き受け」、「その能動性によって、家父長制のシナリオのグロテスクさが、完膚なきまでに暴かれる」と述べ、これが「『敵の武器をとって闘う』抵抗の様式、ポストコロニアルなフェミニズム批評実践の、最良の例の１つである」（上野　2013：196）という説明は、驚くほどこの表象の説明に説得力を持つ。

（4）３人称を使った語り方：耐え難い経験の再現

ベイビーの回顧録は全体を通してほとんどが1人称“I”で語られているが、“I”が突然、3人称“She”または“Baby”に取って代わられる部分がある[16]。サバルタン研究グループの1人であるPandeyは、インドの様々な階層の回顧録を検証し、ダリットの自伝がしばしば著者が無意識の内に1人称から３人称に、あるいは３人称から１人称に突然変わって語られることについて、おそらくこれは「１人称で語るにはその人生を再現する重さに耐えられないこと」であるからと指摘している（Pandey 2013：165−169）。

結婚の意味を知らずに結婚した12歳のベイビーは、それから10年以上の本人の想像を絶する結婚生活を続けた。それを振り返り、結婚生活を描く章に入る前で次のように３人称で語

る。

> 今になって彼女は振り返る。ベイビーはそのお祭り騒ぎの中、その悲しみの１日をどうやって過ごしたのだろうと思う。ベイビーはそれが、彼女の深い悲しみと苦痛の日々の始まりだなどとは、そして彼女の未来がどのようなものか、知る由もなかった。17日目に…ベイビーは結婚したのだった（Halder 2006：32）。

１人目の出産について語る部分は、１章分すべてが３人称で表現されている（Halder 2006：52–56）。出産という当時のベイビーには想像できない経験を前に、病院で家族の付き添いはいない。痛みと恐怖で泣き叫ぶベイビーは、他の患者への配慮から別室に連れて行かれ手足を縛られて出産を迎える。その悪夢のような時間を過ごした13歳のベイビーの姿はすべて、３人称で語られる[17]。

> 私は―まだ14歳にもならない子どもの―私、ベイビーはたった一人で横たわり泣き叫んでいた。他の患者たちが文句を言い始め、ベイビーは別の部屋に移された。そこで彼女はテーブルの上に乗せられ腕と足とを縛られた。…（中略）…もしも彼女の手と足が縛られていなかったら、近くにあるものを拾って粉々にしていただろう。…（中略）…彼女はお母さんを呼んで叫び続けた。「お母さん、ああ、お母さん、私は死んでしまう！助けて、お母さん！どこにいるの？」（Halder 2006：52–53）

Pandeyは「他の人によって所有される物として長い間扱われてきた人々は、立ち上がろうとするとき、彼らの自我〈self〉を叫ばなければなら」[18]ず、彼らは「長い間否定され続けてきた『I〈私〉』の力強い肯定」を意識的にしなければならないと説明する。ベイビーはKumarの下で働き始めてから１年後には、既にこの回顧録を書き終えている。この１年間のベイビーの環境の大きな変化に対して、サバルタンとして生きてきた20数年間の内面もそれに応じて変化したであろう。しかし、全ての自身の経験を“Ｉ”として語るまでにはなっていなかったと言えるのではないだろうか[19]。

４．支配する側の「寛大」：なぜ、雇用者のもとに留まり続けるのか

2002年の出版から10年以上が経ち３冊目の出版も遂げたベイビーは、現在も雇用者Kumarの家事労働者として働く。ベイビーは、「なぜ今でも家事労働者をしているのか？」とよく質問されると言う[20]。本節では、ベイビーと雇用者の関係に変化がないのだろうか、という問題意識から、支配する側のみが発揮できる寛大さと力の非対称性について考察する。

（1）「家族同様」の危うさ

雇用者Kumarは、ベイビーが空いた時間に別のところでも仕事をして収入を増やそうと考えていることを知って、「それならば、私が援助すれば他のところで働かなくてもすむのか？」と言う。答えに困るベイビーに、Kumarは言う。

> 「いいかいベイビー、私を父親、兄、母、友達、なんとでも思いなさい。世の中に助けてくれる人は誰もいないなどと思うのではないよ。何でも私に話すんだ。」それから少しして、彼は言った。「私の子どもたちは私をTatushと呼ぶ。お前もそう呼んでいいよ」。それから私は彼をTatushと呼ぶようになり、彼はとてもうれしそうだった。彼はよく言った。「お前は私の娘のようなものだ。だからこの家の娘なんだ。この家で自分はよそ者だなんて思うんじゃないよ」そして実際、みんな私を家族のようにしてくれた（Halder 2006：141）。

確かに、本の最後の部分で、Kumarとベイビーがそれぞれ新聞を読みながら一緒に朝食をとる場面は、父と娘の様だ。しかしながら、もともと二人は非対称な関係の上にあり、「寛大さ」を行使することができるのは、雇い主の側だけである。「家族のように」は一見「愛情」や「温かさ」を感じさせるものであるが、その「寛大さ」が、不規則な時間を低賃金で働くことを正当化する場合もある[21)]。

「寛大さ」を発揮できるのは、ヘゲモニーを握る側だけであり、それも気分次第で突然寛大でなくなってもかまわないのだ。実際Kumarは、他の家事労働者には決して「寛大」とはいえなかった。ベイビーの初出勤の日のことが、次のように描写されている。

> 私が（雇用者＝Kumarの家に）着くと、35−40歳の未亡人が同じ家に入って行った。主人は家の外にいて花に水やりをしていた。私を見ると家に入り、先ほどの女性に出て行くようにと言った。別の人が見つかった、と言う。彼女は出てくると私にひどい言葉を投げかけた（Halder 2006：138）。

Kumarはたまたま家に出入りしていた牛乳配達の男が紹介したベイビーを雇用することに決め、それまで働いていた家事労働者を、ベイビーが出勤したと同時に解雇した。「寛大さ」は力のある側の気分次第なのである。さらにこの「寛大さ」は、サバルタンが間違いなく支配する者の「寛大さ」を喜んで受け入れ従うことを前提としている。

Kumarの友人の女性はベイビーの自伝の原稿を読んで感動し、ベイビーと文通するようになる。ベイビーはこの女性との文通を楽しみ、「元気のない時に」読むと元気になれるという。しかし、面識がないのにもかかわらず、この女性はベイビーが自分を無条件に受け入れることを前提に書いている点に、両者の非対称性が垣間見える。

彼女はヒンディー語で書いてきた。ちょうど私のような女の子が、彼女の家で働いているに違いない。彼女は私に接すると同じように彼女にも接するのだろうか？私を家事労働者のようには扱わない。友達のようだ。Tatushが手紙を読んでくれる時、私はそれをベンガル語でメモしてあとで読み返した。元気のないときに読んだ。…「もしあなたが私のところに来てくれたら、一緒にドレスアップして踊り歌いましょう。私は時々おしゃれをするのが好きよ。私にドレスを着せてね。私もあなたに着せてあげるわ。私たちが会うときには、心の底から笑いましょう。別に何も笑うようなことがなくても、私たちは笑うのよ。ねえベイビー、あなたの書いたものが大好き、と言われたら驚く？困難な人生が突然美しい日常［prose］になるなんて不思議じゃない？」（Halder 2006：161）

一度も会ったことがないのに、相手からの親愛を前提にする。自ら「上」からおりてきて、「下」にいるサバルタンに「私はあなたと対等になろうとするほど寛大なのだ」、だから相手は当然自分を敬愛するに違いない、というヘゲモニーを握った状態であるのではないか。このような「寛大さ」はそれを発揮できる者が自制心を持っていなければ、サバルタンはその「寛大さ」を恭しく受け止め、感謝することを強要されるのである。

スピヴァクはこの点に関して、両方の経験をしていると言える。スイスの慈善家たちが「寛大」にも難民受け入れをしようと決めた会議の冒頭で話を求められた際に、スピヴァクは、彼ら慈善家たちが示す「気前の良さ」「寛大さ」に対して抱いている嫌悪感をどうやって伝えるかということに心を砕いたと言う（スピヴァク 2009：52）。この「寛大さ」は、それを与える者の評判を高め、その者自身が「気分がよくなる」ために利用されるからである。

一方、自身が高いカーストに生まれたことについてスピヴァクは、「この［高い］カーストのために、人口十億の国で潜在的に暴力的になりうるヒンズー教多数派の一員になっているのです。そのため、わたしの責任は非常に重大です」と自制する（スピヴァク 2009：106）。例えば、普段スピヴァクが教育活動をしている農村に滞在中に、貧困層出身の友人の家で講演原稿の手直しをするという記述がある。この状況をスピヴァクは、「友人たちは［スピヴァクの］抑圧的寛大さの犠牲になっている」と表現するのである（スピヴァク 2009：103）。

ベイビーと雇用者の関係について、「ポストコロニアル的なヘゲモニーの継続」と説明することも可能だろう。同様な関係を、例えば崎山は、アイヌの詩人、知里幸恵と金田一京助に見出している。「金田一が知里幸恵をかわいがっていた事実は、『アイヌ神謡集』を何よりもまずネイティヴ・インフォーマント自身が残した『記録』とみなす眼差しに込められている強大なヘゲモニーの効果を打ち消すことなどできない」（崎山 2007：2）。

（2）元サバルタンの内在化されたサバルタン性

支配する側の意識と自制心に頼らざるを得ないサバルタン性からの脱出を妨げるものは、他にもある。サバルタンが長い間「知的労働の権利」を許されず「肉体労働」に専念せざるを得

なかったことであり、それをサバルタン自身が内面化している場合があることである。スピヴァクは「サバルタンはサバルタン性を主張しないという逆説」があるため、そのサバルタン性を当たり前と感じているサバルタンは多く、「それはほんとうに恐ろしいこと」と言う（スピヴァク 2008：74）。上層階級は、サバルタンは「もともと才能がない」と誤認するが、そうではない。現在サバルタンの人権は憲法で保証されていても、サバルタンは歴史によって長い間、自らの心と頭を使う自由が許されず（スピヴァク 2014：41）、「その才能を伸ばせなくされてきた」（スピヴァク 2014：44）のであり、「差別によって認識力そのものを損なわれてき」たと述べる（スピヴァク 2008：37）。

ベイビーは結婚して学校へ行かなくなってから、10年以上文字にふれる機会を失ってきた。ベイビーが読み書きに自信をなくしていたことが、雇用者Kumarの部屋の本棚を掃除していた時の記述に見られる。

> 彼［Kumar］は本棚から1冊の本を取りだした「この本は何と言う題名だ？言ってごらん」。私はその本を見て考えた。私は読める。でも躊躇した。もし間違えていたら、間違ったことを言ってしまったら？私は自分にいいきかせた、だからって何？そうしたら私は読めません、と言えばいいのだ。私がこんなことを考えている間、Tatushは私を見ていた。「ほら」彼は私を促した。「読んで、何か読んでごらん」私はうっかり口を滑らせた「*Amar Meyebela,* タスリマ・ナスリン」。Tatushは言った。「間違えるのではないかと心配だったのだろう？」（Halder 2006：143）

突然、文字を読むようにKumarから言われて動揺する。読めるのだが、自信がなくてそれを口に出すまでに時間がかかる。サバルタン性が内在化され、肉体労働以外の選択肢を取り上げられ―自身も選択肢として考えなくなっていたベイビーが、再び知的活動に入る、最初の出来事だった。

（3）一般化できない領域にいる、ベイビーと雇用者

本節は、「なぜベイビーは雇用者のもとにとどまりつづけるのか」という疑問から始まった。ベイビーは最近のインタビューでその質問を受け、「自らやりたくてやっている」ことだと答えている。現在は収入が充分にあり、故郷ベンガルに家を建てたので、いつでも帰ることができるのだが、既に高齢になったKumarを置いていくことが気懸りだという。Kumarはベイビーにとって「父親のようで、必要なときにいてくれる友達であり、師」であり、「私の人生は彼によってのみ開かれた」、そして「Durgapur［実家のあるベンガル州の町］に住んでいた時、私は貧しく弱かった。書くことが私に自信をくれた。今では稼ぐこともできるし家族を養っていける。だが、私にとって父親のようなKumarなしにはここまでは来なかっただろう。」と言う[22]。ベイビーとKumarの間には、一般化できない愛着がある。だからこそベイビーは実際、

家族の暴力が及ばない安全なKumarの家で、子どもに教育を受けさせながら10年以上暮らしてきたのである。

ベイビーがサバルタンを抜け出したのは、少なくとも幼少期の学校教育に依ることはあるものの、弱者への福祉など社会基盤によるものは一切なく、ベイビーとKumarのそれぞれの特質と関心そして偶然の出会いによるところが大きいと言える。このことは、次のそれぞれの言葉からもうかがえるだろう。Kumarは「今までもこの家に家事労働者はいたが、君のような人はいなかった。君は自分を家事労働者だと思うな。ここは自分の家だと思ったらいい。私は娘がいないからお前を自分の娘のように思うよ」（Halder 2006：148）とベイビーに伝えている。一方ベイビーも、インタビューで「あなたと同じようなトラウマを抱えている女性たちにメッセージは？」と聞かれ、個人の資質に帰するような答えをする[23)]。

このような展開が同社会で頻繁に起こるとは言い難く、両者の関係をこれ以上研究の俎上に乗せるのは意味をなさないだろう。それならばここから何を学べるのだろうか。

さいごに　サバルタンが獲得した声を公的領域に：「幸運」と「偶然」で終わらせないために

ベイビーはサバルタンを脱した。第2章で描写したようなベイビー自身の資質によって、夫の家を出て「生き延びる」ことができた。そのベイビーを雇ったのは、仕事で自伝に関心を持つ学者だった。ベイビーがKumarに出会って自伝を書くようになったのは、ベイビーに初等教育の素地があったことを除いては、幸運と偶然の積み重ねであった。そこには社会基盤による公的扶助は介在しなかったと言えよう。ベイビーの住む社会では、善良な権力者で自制心のある個人が、気が向いて「寛大さ」を発揮し、安全な場を保証してくれて初めて可能となる。このような社会でサバルタンがサバルタンでなくなるためには、そのような資質を満たす雇用者が一体どれだけ必要なのだろうか。

そこで、公的領域に踏み込む必要性が出てくる。サバルタン性に耳を傾け、サバルタンが自分の声を聞いてもらえるようにすること、そしてサバルタンの抵抗が抵抗と認識されるようにして「なんとしてでも権利を獲得すること」（スピヴァク 2008：75）――それはとりもなおさず、公的領域に踏み込み社会制度を整えて、教育、医療、福祉などのインフラを築き、一人でも多くのサバルタンがアクセスできるようにしていくことだろう（星野 2014：8）。「善良な」金持ちの「寛大さ」に頼る必要をなくし、公的なシステムにサバルタンを取り込むことこそが、「偶然」を「必然」に変える方法であろう。

スピヴァクは教育者として、アメリカで「裕福なエリート学生」に教えるのと併行して、バングラデシュ農村でも過去30年以上にわたって、被差別カーストの子どもたちの教育に携わっている。興味深いのは、スピヴァクがアメリカの大学生とバングラデシュの子どもたちの共通点として、「知的労働の権利」が奪われているのではないかと発言していることだ。アメリカの裕福な学生たちは「卒業後の雇用と収入にしか焦点をおかない学習態度にどっぷりと浸か

って」おり、「検索エンジンに頼って将来のビジネスのことを考えるばかりになっている」という（スピヴァク 2014：37）。

スピヴァクは「強制をともなわない欲望の再配置」という言葉を頻繁に使用し[24]、このためにはサバルタンだけでなく、将来おそらく支配する側になる者たちへの教育もその役割が大きいことを示唆する。「強制をともなわない欲望の再配置」までの道のりは遠いが、取り組むべきことの1つは、サバルタンの声が聞かれるようにすることである。自伝について、スピヴァクは「支配する側の研究者やフィールドワーカーによって仲介され、科学の客観的証拠として利用される」ことを警戒している（スピヴァク2003：224-225）。しかしベイビーの自伝は、偶然と幸運の賜物であったとはいえ、少なくとも「支配する者たち」に「まなざれる」経験を提供し、「支配」や自身の満足のための「寛大さ」に自制を促すことにはなるであろう。

【引用文献】

粟屋利江（1999）「『サバルタン・スタディーズ』の軌跡とスピヴァクの〈介入〉」『現代思想』Vol.27-8、pp211-226

Castaing, A.（2014）“Thinking the Difference: On Feminism and Postocolony［review essay］”, in South Asia Multidisciplinary Academic Journal［Online］, http：//samaj.revues.org/3689、6

長弘毅（1990）「プレームチャンドと日本」、『厳寒の夜 プレームチャンド短篇集』坂田貞二／編、日本アジア文学協会、pp195-211

藤岡恵美子「訳者あとがき」（2002）『沈黙の向こう側―インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声』明石書店、pp361-366

Halder, Baby（2006）, “A Life Less Ordinary”, English Translation by Urvashi Butalia, Zubaan, New Delhi, India, in collaboration with Penguin Books, India。

星野俊也（2014）「序文」、スピヴァク・G・C（2014）『いくつもの声　ガヤトリ・C・スピヴァク日本講演集』星野俊也編、本橋哲也、篠原雅武訳、人文書院、pp5-11

新村恵美『インドの家事労働者―苦境の要因、組織化の試み、課題』『アジア女性研究』第10号（2001）, pp19-25

Pandey, G.（2013）A history of prejudice: race, caste, and difference in India and the United States, Cambridge University Press, New York

崎山政毅（2007）「序」、西成彦・崎山政毅編『異郷の死―知里幸恵、そのまわり』人文書院

――――（2001）『サバルタンと歴史』青土社

スピヴァク・G・C（1998）『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳、みすず書房＝原著 Spivak, Gayatri Chakravorty（1988）, Can the Subaltern Speak?, in Marxism and the Interpretation of Culture, edi. by C. Nelson and L. Grossberg. University of Illinois Press

――――（2003）『ポストコロニアル理性批判』上村忠雄・本橋哲也訳、有限会社月曜日＝Spivak, G.C.（1999）, A Critique of Postcolonial Reason, Harvard University Press

――――（2008）『スピヴァク　みずから語る―家・サバルタン・知識人―』大池真知子訳、岩波書店＝Spivak, Gayatri Chakravorty et al,.（2006）Conversations with Gayatri Chakravorty spivak, London, New York and Calcutta: Seagull Books

――――（2009）『スピヴァク、日本で語る』鵜飼哲監修、本橋哲也・新田啓子・竹村和子・中井亜

佐子共訳、みすず書房＝Spivak, Gayatri Chakravorty（2008），Conversations in Japan：Academic Activism in the Humanities, Rethinking Comparativism, Conversation with Japanese Scholars, Other Asias＝2009
――――（2014）『いくつもの声　ガヤトリ・C・スピヴァク日本講演集』星野俊也編、本橋哲也、篠原雅武訳、人文書院
竹中千春（1996）「サバルタン・スタディーズ」、辛島昇他監修『南アジアを知る事典』平凡社、pp285−286
――――（2010）『盗賊のインド史：帝国・国家・無法者』、東京 有志舎
上野千鶴子（2012）「ジェンダーで世界を読み解く⑤　スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』を巡って」、『すばる』2012年7月号、pp248−273
――――（2013）「オリエントとは西洋人の妄想である：エドワード・W・サイード」『〈おんな〉の思想』集英社インターナショナル、pp175−198
臼田雅之（2003）『カリガト絵の読解から得られるサバルタン世界の景観』東海大学紀要文学部79、pp（27）−（56）

【注】

1）ベイビーの回顧録の中では、Kumarの愛称Tatushとして登場する。本稿では、本文ではKumarを使用し、ベイビーの本からの引用の場合は、原文どおりTatushとする。
2）ウルワシ―・ブターリアはインドの編集者、作家、ジャーナリストであり、女性や社会の弱い立場にいる人々の人権を守る活動家である（藤岡 2002：362）。著書に、藤岡恵美子氏による日本語訳『沈黙の向こう側』（2002、明石書店）などがある。
3）「児童婚」など。
4）サバルタンの定義を遡及すれば、イタリアのA.グラムシが用いた言葉で、軍隊用語として『サバルタン』が命令を受け取るだけの兵士であることから、この語を国家や共同体から切り離された人びとを指すために使われるようになった（スピヴァク 2014：33）。
5）例えば臼田 2003：（28）、崎山 2001：52など。
6）稲盛財団　京都賞2012授賞式記念講演要旨（http：//www.inamori-f.or.jp/laureates/k28_c_gayatri/lct.html）
7）公益財団法人稲盛財団が運営する国際賞。「科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に著しく貢献した人々に授与される」
8）スピヴァク2009：106。スピヴァクは日本の新聞に書かれた自身のカーストと階級について「上流階級出身」と書かれたのは間違いであり、「私が育ったのは、質素な生活と高遠な思索の中産階級です」と話している。
9）ベイビーの物語好きは、父親からの虐待から伯母の家に逃れ、寝床で従妹に話してきかせるジャッカルと農夫の物語に豊かに現れる。友達から聞いた話が、本の5ページにわたって記述されている（Halder2005：13−17）。
10）いずれもベンガルの詩人や小説家などの文学者。ベイビーの本ではそれぞれ次のように表記される。Rabindranath Tagore、Kazi Nasrul Islam、Sharatchandra、Satyendra Nath Dutt、Sukumar Rai。なお、文中のカタカナ表記については、辛島昇他監修（1996年および2012年）『南アジアを知る事典』平凡社を参照したほか、ヒンディー語文学研究者の坂田貞二先生にご教示いただいた。
11）バングラデシュの作家、1962生まれ。バングラデシュで迫害されるヒンズー教家族を描いたデビュー作『ラッジャ（Lajja、恥）』が「イスラム教を冒涜（ぼうとく）した」としてイスラム過激派から殺害予告を受け、亡命生活を送る。

12）Kumarは、インドのウルドゥー語およびヒンディー語の作家、プレムチャンド（1880–1936）の孫にあたる。プレムチャンドは「民衆の内なる声を文学に映し出して、社会の不正を告発」した（長弘毅1990：198）。
13）目上の者への敬愛を表す行為である。
14）スピヴァク2008：80–81。抵抗が抵抗と認められない例として、先住民の女性が裁判で勝訴したにもかかわらず、村落部や地元に戻ると、裁判に訴えた仕返しをされたことを紹介している。
15）円地文子の『女坂』（1961）に関して、ある女性研究者が紹介したと「目の覚めるような読み方」として紹介している。
16）①従妹の結婚式で自分の子ども時代を思い出す場面（Halder2006：26–27）、②自分の結婚式（同：32）、③1人目の出産のとき（同：52–56）、④幼な馴じみのDulalへの想い（同：93）、⑤実母との突然の再会（同：108）、⑥Tatushからこの1年間のことを質問されて（同：162）など。
17）この部分はPandey2013：168–169でも引用されている。
18）PandeyがRaj Gauthamanの観察を引用（2013：169）
19）この点について、Pandeyは「新しく識字者になった者や、未だに公民権を奪われたグループ（階層）の人々は、agency〈ある結果をもたらす力〉, subjectivity〈主観性〉、selfhood〈自我〉がまだ獲得されておらず、すぐに使えるようにはなっていない」と述べる（2013：169）。
20）例えばManoj Sharma, Hindustan Times　New Delhi, January 04, 2014, “A bestselling author, she works as a domestic help in Gurgaon”, http：//www.hindustantimes.com/india-news/a-bestselling-author-she-works-as-a-domestic-help-in-gurgaon/article1-1169444.aspx
21）インドの労働者の労働環境については、新村（2001）を参照。
22）Ashish（2014）“Baby Halder, a maid in Gurgaon, also a bestseller author”, http：//www.merinews.com/mobile/article/Interviews/2014/0/9/interview-baby-halder-a-maid-in-gurgaon-also-a-bestseller-author/15893819
23）「不死鳥のように舞い立ち、目標に向かって闘い続けることです。男性にできることは女性にも十分できます。他人に頼るべきではありません。あなたの殻から抜け出して大きく深呼吸して」Ashish 2014,ibid.
24）例えばスピヴァク2009：112

（平成26年11月4日受理）